ひたちなか市埋蔵文化財調査センター　2026.秋

ひたちなか 埋文だより 65

バス停「埋蔵文化財調査センター」設置　整備された遺跡や博物館が，公共交通機関で行くには不便な場所にあることは，自分自身もよく体験することです。残念ながら，虎塚古墳や十五郎穴横穴群，埋文センターもその例に漏れることなく，公共交通機関では不便な場所に位置していました，令和８年５月までは。令和８年５月 30 日から，市のスマイルあおぞらバスが埋文センター敷地内まで来るルートになり，駐車場にバス停が設置されました。本数は限られますが，JR 勝田駅から 20 数分で来ることができます。従来のひたちなか海浜鉄道湊線中根駅から，のんびりと散歩しながらお越しいただくのもよいですが，暑い夏はバスがお勧めです。　(2026.8.7)

CONTENTS

資料報告　**那珂湊反射炉跡採集の窯資料（その３）－水戸藩領内における近世窯業の一側面－**（川口 武彦）

「私的茨城考古学外史－遺跡・人 出会いと別れ－」　第 14 回　発掘三昧への道　県内編 9　（瓦吹 堅）

ひたちなか市の古墳②改訂版　**海岸線の古墳群－磯合・入道・三ツ塚・新道古墳群－**

横穴墓を歩く㊱　**蓮ヶ池横穴群**　（児玉 めぐみ）

ワンケース・ミュージアム 66　**ひたちなか市の土偶**

遺跡めぐり　**千葉県龍角寺古墳群探訪**

ワンケース・ミュージアム 67　**漆黒の玉**

のぞき見、展示室⑫　**人物埴輪**

歴史の小窓㉟　**神の怒りを鎮める酒か？**

埋文センターの日々　2026 前期

ほか

那珂湊反射炉跡採集の窯資料（その３）

－水戸藩領内における近世窯業の一側面－

川口　武彦

茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」に隣接する山上門脇の斜面において，『埋文だより』44 号で報告した焼け歪んだ焼締陶器碗に接合する口縁部～体部片，焼締陶器小坏，焼締陶器燗徳利，窯道具（籾団子），色見孔栓（蓋）を新たに採集しました。焼締陶器小坏は，『埋文だより』51 号で報告したテンビンに残されている離れ砂の痕跡と高台径が一致することから，耐火煉瓦と一緒に焼物が生産されていた事を裏付ける資料です。色見孔栓（蓋）は，この付近にかつて存在した連房式登窯に使用するもので，完形品であることから連房式登窯の構造を復元する上で貴重な資料です。

はじめに

本報告では、茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」を訪れた際、隣接する山上門（さんじょうもん）脇の斜面から採集した焼締陶器（やきしめ）、窯道具、色見孔栓（蓋）を報告し、これらの遺物から想定される連房式登窯で行われていた窯業について若干の考察を加えます。

那珂湊反射炉は、水戸藩第九代藩主徳川斉昭（なりあき）が海防のための鉄製大砲鋳造を目的として安政年間に築いた炉で、元治元年（一八六四）の天狗党の乱で破壊されました（現在の炉体は昭和十二年の復元）。反射炉は炉内を高温に保つため多量の耐火煉瓦（れんが）を必要とし、その煉瓦を焼いた窯が近接して営まれていました。本報告で扱う資料は、その窯の操業と、併せて行われた日常什器生産の実態を示すものです。

筆者はこれまで、同地点で採集した焼締陶器碗や耐火煉瓦・窯道具を『ひたちなか埋文だより』四四号・五一号（川口二〇一六・二〇一九）で報告してきました。本号では四四号報告の碗に接合する破片に加え、新たに採集した小坏・燗徳利（かんどくり）・窯道具・色見孔栓（蓋）を報告します。

那珂湊反射炉跡の位置と遺物の採集地点

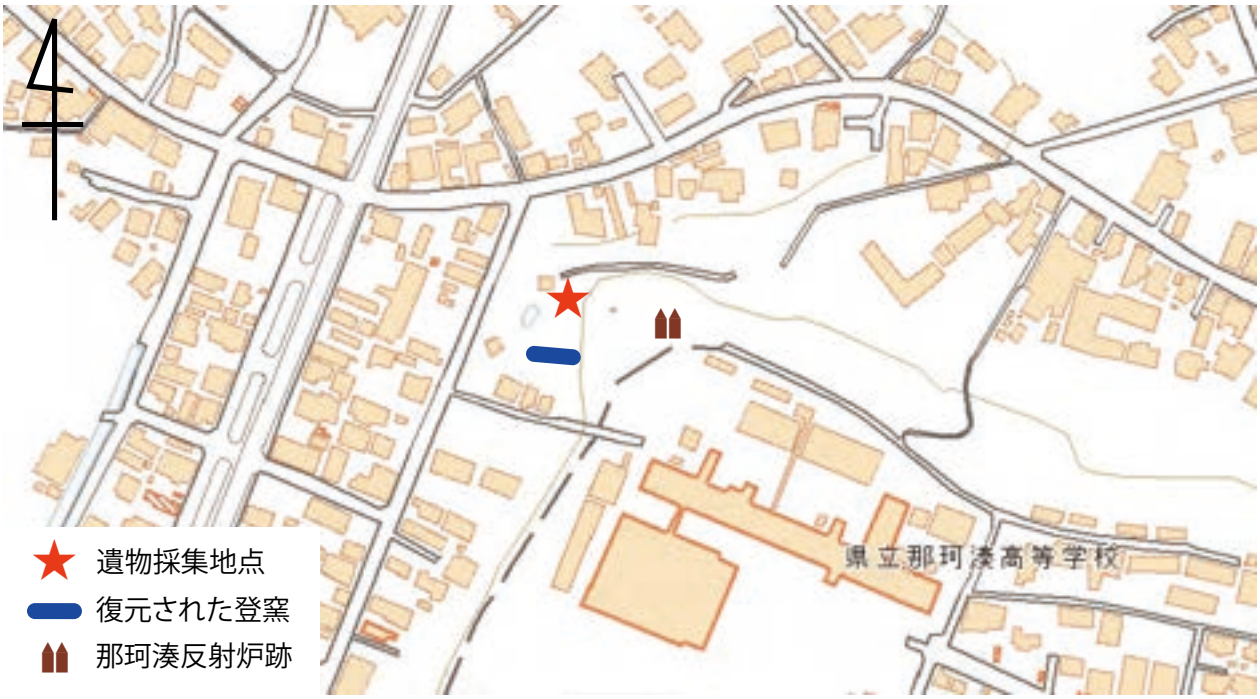


図１　遺物採集地点・那珂湊反射炉跡・復元された登窯の位置関係（地理院地図電子国土 Web より転載・加筆）

那珂湊反射炉跡は、ひたちなか市釈迦町三―二一に所在しています（図1）。那珂湊反射炉は台地上に復元されていますが、遺物を採集した地点は、那珂湊反射炉が立地する台地の斜面で、山上門をくぐったすぐ左手です。

採集した遺物の特徴（図2）

1は、埋文だより四四号で報告した焼け歪んだ焼締陶器碗の底部破片に、二〇二二年十一月二十八日に採集した口縁部～体部の破片が接合したものです。轆轤（ろくろ）成形で、釉は無色透明釉、底裏は無釉畳付です。口径は復元で一〇・八cm、器厚は〇・四～〇・七cm、器高五・八～六・八cm、高台高一・〇cm、高台径三・六～三・九cmです。

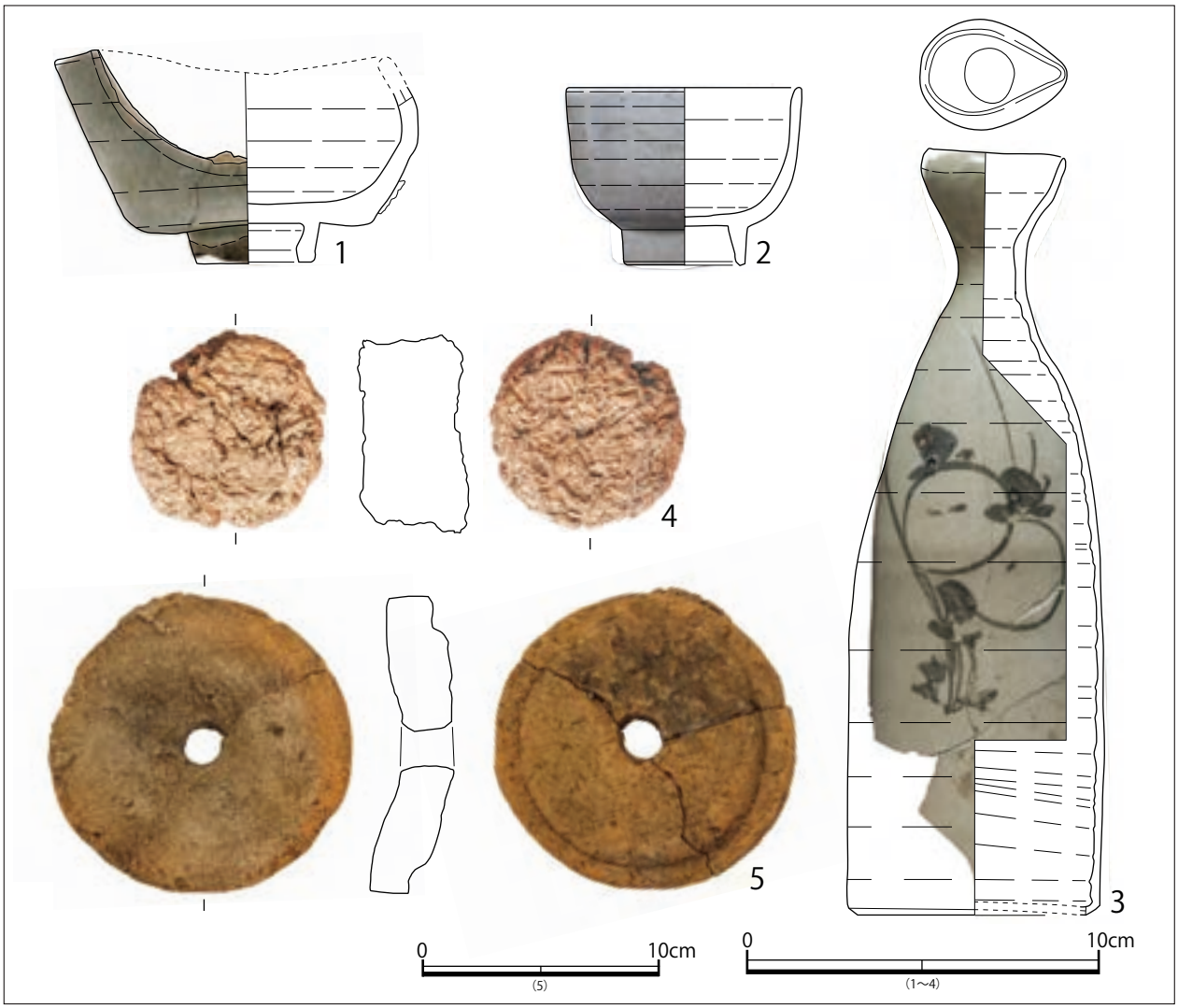


図２　採集した焼締陶器・窯道具・色見孔栓

写真１　丹波立杭登窯（側面観）

写真２　丹波立杭登窯の色見孔を塞ぐ栓（蓋）

胎土に黒色粒子を多く含み、色調は灰白（2・5GY）です。焼け歪んでいることから、この付近にかつて所在した連房式登窯で焼成された在地産の製品と考えられます。また、体部に別個体の破片が固着しており、五一号で報告した窯道具（テンビン）などに載せて焼成した際に変形して固着したとみられます。

2は焼締陶器小坏の口縁部～高台部の破片です。中央で半分に割れ、轆轤成形で、釉は無色透明釉、底裏は無釉畳付です。無稜坏形に分類されるもので、口縁部径六・七㎝、器高五・一㎝、器厚〇・二～〇・五㎝、高台径一・〇㎝、高台高一・〇㎝です。胎土に黒色粒子を多く含み、色調は灰白（7・5Y7／1）です。この小坏は、埋文だより五一号で報告した窯道具(テンビン)に残る離れ砂の痕跡と高台径が一致することから、当該窯において耐火煉瓦と焼締陶器とが同じ窯で焼かれていたことを具体的に示す資料であり、四四号報告資料と同様、在地産の製品と考えられます。

3は在地産の焼締陶器燗徳利の口縁部～底部の破片です。轆轤成形で、釉は無色透明釉、底裏は無釉です。口縁部径四・二×三・〇㎝、器高二一・七㎝、器厚〇・二～〇・四㎝、底部径七・二㎝です。胎土に黒色粒子を多く含み、色調は灰白（5Y7／2）です。全体的に細かい貫入が認められ、外面には鉄釉により草花文（柿と柿蔕カ）が描かれています。鉄釉で草花文を施した燗徳利は、日常什器のなかでも装飾性の高い製品であり、当該窯が耐火煉瓦や粗製品の生産にとどまらず、意匠を凝らした什器をも手がけていたことを示すものです。文様の描法や器形は操業年代を考えるうえでも手がかりとなり、今後、類例との比較検討が期待されます。

4は窯道具で、籾団子（胎土目）と呼ばれるものです。直径約五・七㎝、高さ約三・二㎝の円柱状を呈するもので、表面全体に籾の痕跡が認められます。陶器を重ね焼きする際に、器同士や窯床の熔着を防ぐために使われた窯道具と考えられます。色調はにぶい橙（7・5YR6／4）、重量は九五・三gです。籾団子、過去に採集したトチンやテンビン、離れ砂が一括して認められることは、当該窯が製品を重ね積みして効率的に焼成する体制を備えていたことを示しており、単発的な生産ではなく、一定量をまとめて焼く操業が行われていたことをうかがわせます。

5は茨城県考古学協会ニュース第一二三号（川口二〇二六）で速報として紹介した、色見孔（検火孔）を塞ぐ栓（蓋）です。表面は直径一三㎝で、中央に直径二・〇㎝ほどの円形の孔が穿たれています。裏面は直径一〇㎝、高さ〇・五㎝の大きさで、中央が円形状に盛り上がっています。色調はにぶい黄橙（10YR7／3）～橙（7・5YR7／6）、重量は五〇〇gです。裏面には煤や煤状の付着物が全体的に認められ、表面は周縁部が被熱により赤化しています。円盤状で中央に孔を有し、栓（蓋）の中央には装着・取り外し用の棒を射し込む孔が穿たれています。この他に図化していない別個体の2分の1程の破片（重量二四〇g）が1点あります。

色見孔は、焼成中に窯内の火色や炎の状態を確認し、また試片（色見）を出し入れするために設けられるもので、これを土製の栓（蓋）で塞ぐ構造は登窯に広く認められます。**写真1・2**に示した兵庫県丹波篠山市の丹波立杭登窯は、現在も操業を続ける割竹式登窯で、その側面観に色見孔を土製の栓（蓋）で塞ぐ実例を確認できます。今回、完形に近い栓（蓋）と別個体の破片が採集されたことは、失われた当地の連房式登窯において色見孔が焼成室に複数設けられ、それを塞ぐ構造がとられていたことを示す資料であり、その構造を復元的に理解するうえで貴重です。

考察―耐火煉瓦生産窯の性格と技術系譜―

以上のように、山上門脇の斜面からは、耐火煉瓦や窯道具とともに、焼締陶器の碗・小坏・燗徳利が採集されました。反射炉に耐火煉瓦を供給した窯が、同時に在地の需要に応える日常什器をも焼いていたことになり、藩の事業のために設けられた窯が平時には民間的な生産をも担った、幕末期の水戸藩領における窯業経営の

柔軟な一側面をうかがわせます。

連房式登窯は、近世初頭に朝鮮半島の割竹式登窯技術が肥前（唐津）に導入され、各地へ広まった窯構造です。トチンやテンビンは肥前窯業圏で一般的な窯道具で、離れ砂や籾団子（胎土目）を用いる技法も肥前系に広く共通することから、当該窯の技術は肥前を源流とする近世登窯技術の系譜上に位置づけられる可能性があります。加えて、反射炉築造には盛岡藩の大島高任をはじめ薩摩・三春など藩外の技術者が招かれ、耐火煉瓦の製造にも薩摩の職人が関与しました。当該窯の技術系譜には、在地の伝統に、反射炉事業を通じて流入した外来技術が重なっていた可能性も考えられます。

この点で示唆的なのが、徳川斉昭が天保九年（一八三八）に水戸で開いた七面製陶所です。斉昭は天保十二年に肥前唐津の陶工傳五郎を招いて製陶所を拡張し、焼締陶器を主体とする日用什器（七面焼）を焼かせました（関口編二〇一七）。当該窯の製品にも焼締陶器の日常什器が含まれ、七面焼と通じる特徴を示します。

ただし当該窯の遺構は未確認で、工人や技術の出自を直接語る文献も特定できておらず、ここで述べた系譜はあくまで採集された遺物と歴史的状況からの推定に基づきます。

おわりに

本報告では、那珂湊反射炉跡に隣接する山上門脇の斜面から採集した焼締陶器の碗・小坏・燭徳利、窯道具（籾団子）、色見孔栓（蓋）を報告しました。四四号報告資料に接合する碗の破片に加えてこれらを報告したことで、反射炉に耐火煉瓦を供給した登窯が、同時に焼締陶器の日常什器をも生産していたことが、より確かな裏づけをもって示されました。とくに完形に近い色見孔栓（蓋）は、失われた連房式登窯の構造を復元的に理解する手がかりとなります。

一方、当該窯の遺構は依然として未確認であり、窯の規模・構造・操業年代や、製品の年代的位置づけ、工人・技術の出自にはなお検討の余地を残します。近い将来、当該地点で発掘調査が行われ、連房式登窯の遺構が確認されることを期待します。あわせて、七面焼や笠間焼など常陸国内の近世窯業や、反射炉建設に動員された外来技術との比較を進めることで、水戸藩領内における近世窯業の実像をより具体的に描くことができれば幸いです。なお、本号で報告した採集遺物は全て、ひたちなか市教育委員会へ寄贈しました。

【謝辞】

本報告の作成に当たり、稲田健一氏、佐々木義則氏、田中美零氏には本号へ公表する機会を与えていただきました。また、河野一也氏、瓦吹　堅氏、関口慶久氏からは、採集資料について有益な御助言を頂戴しました。御芳名を記して感謝いたします。

参考文献

川口武彦　二〇一六「那珂湊反射炉跡採集の窯資料―水戸藩領内における近世窯業の一側面―」『ひたちなか埋文だより』44　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

川口武彦　二〇一九「那珂湊反射炉跡採集の窯資料（続報）―水戸藩領内　における近世窯業の一側面―」『ひたちなか埋文だより』51　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

川口武彦　二〇二六【私が拾った考古資料紹介―那珂湊反射炉跡採集の有孔円盤状土製品について】『茨城県考古学協会ニュース』第123号　茨城県考古学協会

関口慶久編　二〇一七『七面製陶所跡　遺構・遺物編　第1次～第3次発掘調査報告書』水戸市教育委員会

土偶は、縄文時代を中心に粘土を人の姿のように成形して焼いて作られた土製品で、胸の膨らみや大きく突出した腹部が表現されていることから女性、特に妊娠している姿を表現していると考えられています。主に祭祀で使用されたと考えられていますが、その用途は明確にはされていません。今回は、そんな謎に包まれた土偶について市内での出土例を紹介し、解説する展示を行いました。

土偶が出土する遺跡

市内では三二六もの遺跡が確認されており、縄文時代の遺構・遺物が確認されている遺跡は一三六遺跡あります。そのうちの七遺跡から土偶の出土が確認されています（図1）。各遺跡の出土数は一、二点と出土数はそれほど多くはありませんが（表1）、その中で市内最大級の土偶が確認されています。縄文時代の遺跡は多くありますが、発掘調査がまだされていない場合も多く、これからの調査で土偶が確認される可能性がまだまだあります。

遺跡名	点数	時期
むかいのえー 向野A遺跡	1	早期
たけだ いしだか 武田石高遺跡	1	前期
きみがだい 君ヶ台遺跡	1	後期ヵ
にしなかね 西中根遺跡	1	後期
しいづかにしかいづか 蜆塚西貝塚	2	後期
みたんだしいづかかいづか 三反田蜆塚貝塚	38	後期
だいた ぼうかいづか 大田房貝塚	1	晩期ヵ

表1　各遺跡の土偶出土数

図1　市内の土偶出土遺跡分布図

貝塚である三反田蜆塚貝塚では、これまでに10次の発掘調査が実施され、最も多い38点の土偶が出土しています。長さ39㎜・幅27㎜で、上下左右対称に突起が出て「十」字の形をしています。中心には突起が剥がれた痕があり、乳房のような表現があったと考えられています。上部の突出には、向野A遺跡の土偶と同じように孔もあります。

三反田蜆塚貝塚では、一九八六年に実施された藤本弥城氏による発掘調査で、一四点の土偶が出土しています。主に縄文時代後期（約四四〇〇～三二〇〇年前）に属する土偶で、顔がハートのような形でO脚のずっしりとした脚がつき自立するハート形土偶、胴部が中空（空洞）で筒状の形をした筒形土偶、顔が三角形や楕円の形をし胴部は板状で自立しない山形土偶と呼ばれるものが確認されています。ほぼ完形のハート形土偶と山形土偶は一九九〇年に市指定文化財に登録されています（ポスターに使用

各遺跡の土偶について

向野A遺跡では、約一万一千年前から始まる縄文時代早期の撚糸文系土器の包含層から小さな土偶が一点出土しました。大きさは、現存する長さ17㎜で下半部は欠損しています。頭部や四肢はなく、胴部に乳房が表現され、頭部にあたる位置に三角形の浅い孔があけられています。茨城県内でも最古級の土偶です。

武田石高遺跡では、約六千年前の縄文時代前期の興津式土器が広く集中する地点から土偶が一点出土しています。長さ39㎜・幅27㎜で、上下左右対称に突起が出て「十」字の形をしています。中心には突起が剥がれた痕があり、乳房のような表現があったと考えられています。上部の突出には、向野A遺跡の土偶と同じように孔もあります。

した土偶)。一九九〇年に実施された勝田市教育委員会(現ひたちなか市教育委員会)の調査では住居跡の覆土から、腕部と脚部は欠けていますがほぼ完形の土偶が一点と、その周辺から土偶の肩部と思われるものが一点出土しています。出土している土器の型式から、後期に属するものと考えられています。その他に個人で採集された土偶の脚部が知られています。

図2　土坑から出土した土偶の様子

土偶埋設遺構

一九九九年に実施された三反田蜆塚貝塚の発掘調査で土偶二点が並んだように検出されました(図2)。土偶は、両腕と下部が欠け胴部に乳房の表現があるものと、頭部・両腕・両足を欠き、乳房の表現がなく腹部が大きく膨らんだものがあります。検出されたときには、顔が残っている方の土偶の胴部を覆うように土器片が並べられていたようです。このような出土状況から祭祀に使用した土偶を土坑に埋設したのではないかと考えられています。この二点の土偶も二〇〇八年に市指定文化財に登録されています。

土偶は欠損して出土する事例が多いことから、土偶を故意に打ち割り、埋めたのではないかという説が長い間唱えられてきました。しかし、完形で出土する土偶も多く、また破損した土偶をアスファルトで修復した事例が確認される点から、故意に破壊したという説に否定的な意見も多くあるようです。土偶はどちらも仰向けで並んでおり、何らかの意味を持って並べられたとは思います。また、それぞれの形の表現が違うことにも意味があるかもしれません。土偶の利用方法や目的はまだ謎のままです。他にもこのような出土事例が増えれば何かわかってくるかもしれません。

(田中美零)

※紹介した土偶の一部は，標本陳列室にて常設で展示しています。

展示風景

のぞき見展示室 その12

第12回で紹介する遺物は、鉾ノ宮2号墳から出土した埴輪です。

埴輪は古墳時代の三世紀後半～六世紀末頃にかけてお墓である古墳の上や周囲に立てて並べることを目的に作られた素焼きの焼き物です。よく土偶と間違われますが、土偶は古墳時代よりはるか前の縄文時代に作られた焼き物です。サイズに大きな違いがあり、土偶は10～30cmほどの片手で持てる大きさが普通ですが、埴輪は50～60cmが普通で、両手で抱えたり二人がかりでないと持ち上がりません。また、古墳には埴輪の下部を埋めてたてるため、人や動物の表現の下が円筒状に続いています。

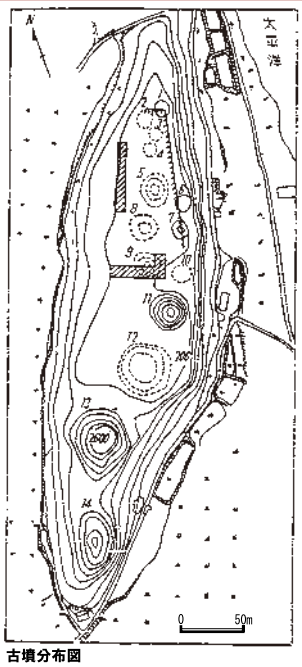
鉾ノ宮2号墳からは、円筒埴輪・人物埴輪や馬形埴輪などが出土しています。馬形埴輪と人物埴輪の頭部四体は一九八〇年に市指定文化財に登録されています。人物埴輪は目の周りや下が赤彩されており、顔の横には耳飾りと思われる装飾がつけられています。一体の口は口角が上がり微笑んでいるように見えることから「笑う埴輪」として親しまれています。

(田中美零)

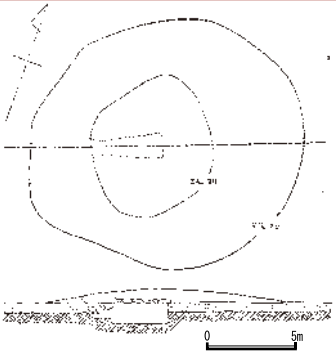
墳丘と横穴式石室

況）

入道古墳群第１・２号墳



古墳分布図



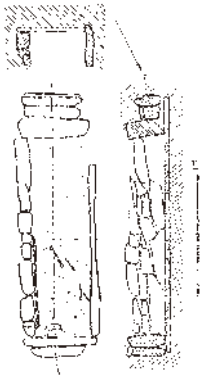
第２号墳の墳丘と埋葬施設実測図

移築された第 11 号墳の埋葬施設近くに建つ記念碑

第２号墳埋葬施設類例資料（磯崎東古墳群 2011 年度第１号石室）

第 12 号墳出土壺形埴輪

移築された第 11 号墳の埋葬施設



三ツ塚古墳群第２・11・12 号墳

第２号墳墳丘実測図と葺石の状況

第２号墳横穴式石室実測図

第２号墳出土フラスコ形瓶

第２号墳出土刀装具

新道古墳群第２号墳の埋葬施設と出土遺物

墳は，出土した遺物から5世紀
ことから，現時点で年代が判明
市内で最も古い古墳となります。

見学ガイド

＊磯合古墳群赤坂稲荷古墳は，稲荷神社として残っておりますが，東日本大震災の影響により，墳丘への立ち入りや石室の見学はできません。

＊三ツ塚古墳群第 11 号墳の埋葬施設は，旧平磯中学校敷地内に保存されていますが，現在学校が閉校しているため，見学ができない状況にあります。

＊古墳から出土した遺物の一部は，ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しています。

2 海岸線の古墳群－磯合・入道・三ツ塚・新道古墳群－

赤坂稲荷古墳の

磯合古墳群は，磯崎東古墳群から続く古墳群で，26 基の古墳が記録されていますが，現在はその多くが消滅しています。墳丘が残されている貴重な例として，赤坂稲荷古墳があります。この古墳は，直径約 26.5m，高さ約４mの円墳です。埋葬施設は，墳丘南側に横穴式石室が確認できます。当古墳からは，埴輪等の遺物が出土していないため，７世紀頃の時期の古墳と考えられます。

入道古墳群では，11 基の古墳が記録されています。これらの古墳の大半が，直径約 20m，高さ約 2mの円墳です。この他にも，墳丘を持たない石室が多数あることが記されています。このような古墳群の様相は，磯崎東古墳群や磯合古墳群と類似します。1974 年には，２基の古墳が発掘調査されています。第１号墳は，南北 10.5m，東西 12.0mの楕円形で，高さは約２mを測ります。埋葬施設は竪穴式石室で，大刀１口と鉄鏃１個が出土しました。時期は，５世紀後半と考えられます。第２号墳は，直径約 15m，高さ約３mの円墳と推定されています。墳丘には 40 ㎝前後の石を用いた葺石がみられます。埋葬施設や遺物は出土していません。2020 年には，海を臨む斜面部に墳丘を持たない石棺墓 6 基を確認しました。このような石棺墓は過去に３基を確認しているので，合計９基の石棺墓があったことになります。

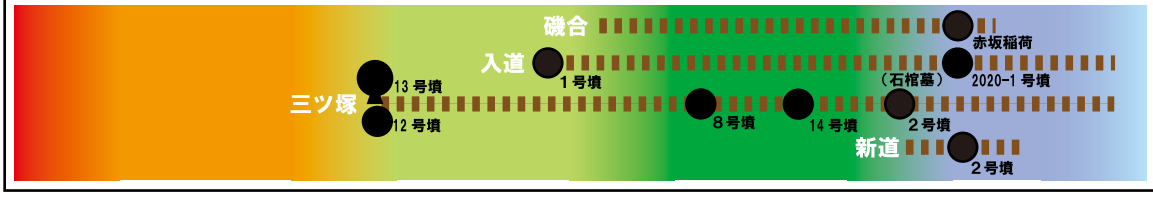
三ツ塚古墳群は，14 基の古墳で構成されています。古墳は円墳が主体で，2015 年の茨城大学の調査で第 13 号墳のみ全長約 70mの帆立貝形古墳であることが判明しています。古墳の規模は，直径 10mの小型のものから，50mを超える大型円墳，70mの帆立貝形古墳がみられます。発掘調査は 1949 年と 1957 年に実施されています。調査の詳細については，『埋文だより』29 号に掲載していますので，ここでは一部の古墳のみご紹介します。第 12 号墳は，直径 50.9m，高さ 4.2mの大型円墳です。墳丘には葺石がみられます。注目されるのは，出土遺物の胴部が細長く，口縁部が段を有して開く壺形埴輪です。この埴輪は非常に珍しい形状で，那珂川対岸の大洗町の磯浜古墳群日下ヶ塚（鏡塚）古墳や車塚古墳との関連が考えられます。第２号墳は，直径約 12m，高さ約１mの低墳丘の円墳です。埋葬施設は，地山を掘り込んで造られた横穴式石室で，羨道部は地表から玄室に向かって斜めに下がっていきます。このような特徴的な埋葬施設は，2011 年度に実施した磯崎東古墳群の調査でも多数確認されています。

古墳の時期は，出土遺物から５世紀初めから７世紀中頃まで継続していたことが判っており，市内でもっとも長い期間，古墳が造られていた古墳群と考えます。

第１号墳埋葬施設（大刀出土状

新道古墳群は，1987 年に２基の古墳が発掘調査されています。２基とも墳丘はなく，埋葬施設は第２号墳が横穴式石室です。第２号墳からは，須恵器のフラスコ形瓶１点と金銅製の刀装具４点が出土しています。第２号墳の時期は，７世紀前半と考えられます。

以上のように，これらの古墳群には，葺石の存在や特徴的な横穴式石室，墳丘を持たない石棺墓，埋葬施設に海岸の石を使用しているなど，多くの共通点がみられます。よって，これらの古墳群は，５世紀から７世紀にかけて海岸線に沿って造営された一つの大規模な古墳群といえ，「ひたちなか海浜古墳群」と呼称しています。



ミニ知識

三ツ塚古墳群第 12 号墳
初頭の年代が推定される
している古墳としては，市

昭和四八年二～三月の期間、千葉県流山市下花輪第二遺跡の三次調査を終え（『埋文だより』60掲載）、帰省途中に後輩達と水戸駅で下車し、県民文化センター（現ザ・ヒロサワ・シティ会館）で開催されていた「茨城の考古展」を展観。県内の考古資料の総合的な展示は初めてであった。その後、四月二〇日から九月一五日までの約五か月間、茨城県住宅供給公社による双葉台団地造成に伴う水戸市開江町向井原遺跡の調査に参加した。この調査は水戸市教育委員会伊東重敏さんが調査担当者となり、國學院大學・茨城大学などの学生や地元の高校・作業員などの協力を得て行われた。検出された遺構は、竪穴住居跡47軒（縄文中期1、弥生中期3、弥生後期8、古墳前期33、不明2）のほか、方形周溝墓4、円形周溝墓1、火葬墓16、大溝1、土坑2など。古墳時代前期集落のほぼ中央に位置した16号住居跡は、一辺九mを超えるような大型住居跡で、土器も多く出土した。方形周溝墓は住居跡群の南側に位置し、東側には幅三mほどの大溝が集落を区画するように南北方向に走ることが確認された。火葬墓は倒立型や正位型で、骨蔵器は木葉下産須恵器がほとんどだった。我々が調査に入った時、すでに遺跡内は重機によって表土が除去されており、各遺構の平面プランの確認作業から始めたが、火葬墓の中には重機で動いて火葬骨が見えていたものもあった。水戸市内での調査で、重機で表土除去を実施した遺跡は向井原遺跡が最初だった。

私的茨城考古学外史―遺跡・人　出会いと別れ―

第14回　発掘三昧への道　県内編9

水戸市向井原遺跡、城里町ガンミチ古墳

瓦吹　堅

昭和48年3月 県民文化センター前にて

三月に練馬から北茨城の実家へ引越し、六月八日に実家から水戸市赤塚の一戸建の借家に移った。家財道具類は地元の小中同級生上遠野邦夫君がトラックで運んでくれた。この一戸建の借家は伊東さんが探してくれた家で、家賃は覚えていないが、風呂・台所・トイレ付き二間一〇坪の平屋だった。この借家に引越すまでの期間は、赤塚駅近くの角屋旅館に宿泊した。向井原遺跡までは、赤塚駅から笠間行きのバスに乗り、上中妻小学校入口で下車して徒歩一〇分で遺跡に着いた。発掘が始まってから少し経つと大学同期の佐藤正好君が調査に参加。そんな中の七月初めの朝、伊東さんに「市役所を六月三〇日で辞めた」と聞かされて驚いた。夏頃、現場で慰労会が開催された。その時のスナップには学生のほかに常陸太田市の植田友次さん（平成七年没）や水戸市の管野莞爾さん（平成二一年没）などの顔があり、水戸三高生の市毛美津子君やキリスト大1年の鯉渕和彦君も写っている。

発掘終了後、私は当時の曙町公民館で接合作業や実測作業を進めた。住居出土の土師器は殆ど実測を終えたが、弥生土器は未整理のままだった。水戸市委員会では伊東さんが退職したこともあって整理や報告書刊行の予算は、確保されておらず、写真中心の略報の発行で終了している。

向井原遺跡調査中の七月一六日から八月一一日の期間、昭和四七年四月に発足した茨城大学考古学研究会は、茨城大学裏の笠原神社東側に位置する文京遺跡の発掘を実施した。中村君の合宿所的

向井原遺跡慰労会

向井原遺跡調査参加者

な下宿に夕方顔を出すと、数名が麻雀。自分たちが主体の調査という自覚の無さに怒りが込み上げ、参加者全員を茨城大学グランドへ連れ出して説教した覚えがある。文京遺跡が調査終了後には、研究会の会員は再び向井原遺跡の調査に参加して慰労会の開催となったが、平安時代の住居跡6軒ほどが調査された文京遺跡の調査報告書は未だ出されていない。研究会ではその後文化課高根信和先生の指導で弘道館孔子廟の調査に参加したと記憶している。

同年一一月二〇～二六日、旧桂村（現城里町）ガンミチ遺跡の調査に参加した。この調査は、ガンミチ遺跡の南端部に点在する小古墳が対象で、土取り工事に伴うものであった。調査主体は桂村教育委員会であり、調査担当は六月に水戸市役所を退職した伊東重敏さん。私のほかに國學院大學生の橋本勉・田宮一典君が調査に参加し、佐藤正好君の協力も得た。宿舎は春園鉱泉で、寒い初冬に大きな岩風呂風の鉱泉風呂は最高だった。この宿屋は狩猟宿としても多くのハンターに利用されており、発掘中も周辺で発砲音がよく聞こえた。

1号墳は直径六m、高さ一・四五mほどの小円墳であったが、埋葬施設は検出されなかった。古墳の北側には平安時代の竪穴住居跡1棟が検出され、土師器などが出土した。調査中のある日、桂村消防団長の招待を受けて、狩猟した野生ウズラの鍋を御馳走になった。その身は柔らかくて非常に美味しく、杯を重ねた。

その調査を終えて水戸に戻ると、文化課西宮一男先生の依頼で土浦市烏山遺跡の整理を手伝った。整理場所は千代田村（現かすみがうら市）新治小学校の旧講堂で、大学後輩の桜井二郎、高校後輩の吹野浩子（ヒロ）・菅谷美穂子（ミホ）君も手伝いに来た。その後桜井君とは昭和五二年度から財団で同じ釜の飯を食うことになり、ミホは平成一二年四五歳で鬼籍に入ったが、ヒロとは現在も手紙の遣り取りが続いている。

この頃、ぴんからトリオの「女の道」が流行り、そのほか「喝采」、「学生街の喫茶店」、「心の旅」、「神田川」をよく耳にした。

埋文センター外装工事中

2026年8月

千葉県龍角寺古墳群探訪

今回の遺跡めぐりは、千葉県栄町と成田市に位置する龍角寺古墳群を見学しました。龍角寺古墳群探訪は、二〇一五年度以来、二回目となります。

当古墳群は、近隣の古代寺院の龍角寺とともに、一九七六年につくられた千葉県立房総風土記の丘史跡公園内に位置しています。二〇〇四年に隣接する「千葉県立房総のむら」と統合したことにより、千葉県の原始・古代から近世・近代までを学ぶことが出来ます。

風土記の丘資料館での見学風景

見学では、まず「風土記の丘資料館」で、学芸員の説明を受けました。展示室は前回訪れてからリニューアルされており、浅間山古墳の石室模型などを見学しました。昼食後は、方墳で一辺七八m、高さ一三mの古墳時代終末期では全国第一位の規模を誇る岩屋古墳を見学し、その規模の大きさに参加者から感嘆の声が聞かれました。

当初は、敷地内に密集する古墳を見学する予定でしたが、大雨のため残念ながら野外での見学はほとんどできずに帰路につきました。

（稲田健一）

岩屋古墳の石室の見学風景

歴史の小窓　その三五

神の怒りを鎮める酒か？

福島県棚倉町の流廃寺跡について書かれた論文に、八五〇年に起きた出羽国庄内大地震の際、会津では古墳の上で神の怒りを鎮める祭祀が行われた、と書かれていました。

あっ、と思いました。なぜかというと、「歴史の小窓　その二〇」でとりあげた、ひたちなか市津田西山古墳群の古墳の上から出土した須恵器大甕を思い出したからです。関東地方でも八一八年に大地震があり、大きな被害が出たことが記録に残っています。震源地に近い埼玉から群馬のあたりでは、この弘仁地震の際の地割れや液状化の跡があちこちで発掘されています。きっとひたちなか市あたりでも被害があったことでしょう。この大甕は年代が九世紀中頃と考えられますので、地震の年代に合ってきます。会津の例を参考にするならば、古墳の上から大甕が出土した理由は、古代の人々が先祖の大きな墓の上に酒の入った大甕を据えて神に奉り、神の怒りが鎮まるように祈ったからなのかもしれません。

（佐々木義則）

参考文献　荒木隆二〇一八「平安時代の山林寺院に表された神仏習合の姿」『福島県立博物館紀要』第三二号、鴨志田篤二・佐々木義則二〇〇一「津田西山古墳群出土の須恵器甕」『茨城県考古学協会誌』第一三号

横穴墓を歩く 36

宮崎県宮崎市
蓮ヶ池（はすがいけ）横穴群

児玉　めぐみ
（宮崎市教育委員会文化財課）

蓮ヶ池横穴群は、六世紀後半から七世紀にかけて造られた横穴群で、南九州で保存状態の良好な横穴が多数群集する貴重な横穴群として昭和四六年七月に国の史跡に指定されました。現在までに八二基の横穴が確認されており、古墳時代の墓制の広がりや、中央政権から離れた位置にある地域社会のあり方を知る上で、極めて重要な存在です。

本横穴群は、細長く突き出た丘陵と丘陵との間にある谷を単位として、大きく三つの集団に分けられます。それぞれの谷は、墓道のような役割を果たしていたと考えられています。

本横穴群には二つの特徴があります。一つ目は、墳丘をもつ横穴が二つあることです。本横穴群中で最古段階（六世紀後半）の横穴である一二号横穴は、その上部に墳長約三七ｍの前方後円墳である一号墳があります（図1）。また、七世紀前半に造られた五三号横穴も、上部に直径一五・六ｍの円墳である二号墳があります。それぞれの横穴と墳丘との位置関係や横穴の規模から、一二号横穴が一号墳の、五三号横穴が二号墳の埋葬施設であると考えられています。一二号横穴が本横穴群の造墓契機となった造墓集団の長の墓とみられること、五三号横穴が一二号横穴に続く造墓集団の長の墓に位置付けられること、両者が横穴が分布する谷の入口付近に位置することは、本横穴群の形成過程を理解する上で重要な横穴であるといえます。

二つ目は、横穴の壁面に線で絵を描いた線刻壁画をもつ横穴がみられることです。線刻壁画をもつ横穴は、現在五基確認されており、描かれた線刻は船や人物、木の葉、格子文等があります。中でも五三号横穴の玄室には、当時の人々が抱いていた死生観が推測できる線刻壁画が確認されています（写真1）。すなわち、入口からみて右側の壁には、船を中心にその上下に人物群、鳥、格子文が描かれた一群があり、これは死者の魂が船に乗り、鳥に導かれながら黄泉の国へと旅立つ姿とそれを見送る人々であると考えられています。また、対面の左側の壁には、鬼面文とその両脇にそれぞれ一人の従者とみられる人物が描かれています。鬼面文は、邪悪なものや災い等を避けて追い払う意味があるとされ、また、両脇の人物とあわせて、仏教の影響をうけた三位一体の構図ではないかと考えられています。

蓮ヶ池横穴群は現在、史跡公園として整備され見学ができます。また、ＶＲ動画等もＷＥＢ上に公開していますので、ぜひご覧ください。

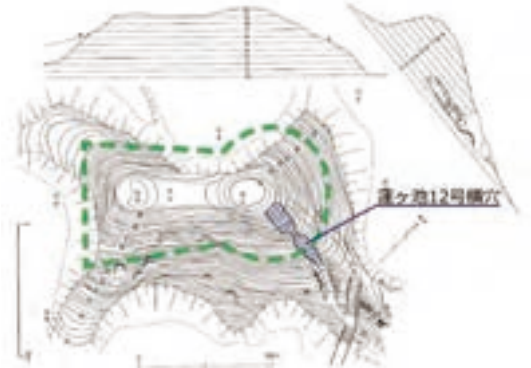


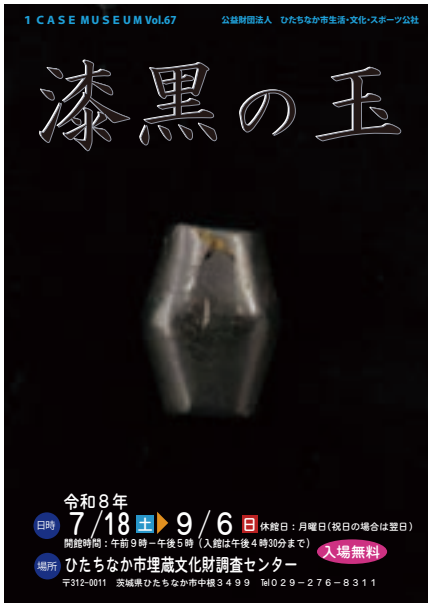
図1　蓮ヶ池1号墳墳丘測量図

写真1　蓮ヶ池 53 号横穴の線刻壁画

【参考文献】
藤本貴仁　一九九八「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号　宮崎考古学会
柳沢一男　一九九八「宮崎市蓮ヶ池横穴墓群の墳丘を有する横穴墓と線刻壁画」『宮崎考古』第16号　宮崎考古学会

蓮ヶ池横穴群パンフレット QR コード

蓮ヶ池横穴群 VR 動画 QR コード



今から一〇年前の二〇一六年、市内鷹ノ巣遺跡の古墳時代の住居跡から石炭を材料とした「漆黒の玉」が出土しました。当初は火事で炭化した家の建築部材と間違えていましたが、孔があることから訂正できました。ほとんど類例のないもので、他の調査でも注意していたところ、市毛上坪遺跡からも石炭片が出土しました。

このような玉は「埋木製の玉」と呼ばれており、全国でも珍しい玉であることがわかりました。今回の展示では、県内の類例（東海村1例・日立市2例）も展示し、この玉の研究の出発点にしたいと思います。

「漆黒の玉」は、大賀克彦氏が「琥珀製玉類と関係が深いと想定される玉とし、器種や時期的なまとまりが強い」（大賀二〇一三）としています。大賀氏は、器種は大部分が棗玉で、時期は古墳時代後期中葉から後葉に集中するとしており、今回紹介した事例もその中に収まります。また、「素材として琥珀と類似した利用方法であることや、分布が分散的で東日本でも比較的多く出土することは、列島内、特に房総半島周辺での製作を示唆」しています。さらに、「一方で、盛行期間が一時的である点は列島外部からの舶載と調和的である」とし、韓国の武寧王陵（6世紀前半）から埋木製の棗玉が多数出土している点を留意しています。

出土したものの集成としては、千葉県流山市の加町畑遺跡J地点の調査報告書（流山市二〇一五）の中で、千葉県内の埋木製玉類の集成と分類・編年を行っています。また、有機質玉類を研究されている小林友佳氏に今回ご指導いただき、古代歴史文化協議会の「古墳時代の玉類」のデータベースも補足としてまとめたものが表の出土遺跡数の一覧です。この表は全国すべてを調べたものではありませんが、小林氏によると、内陸地域よりは海を持つ地域（特に太平洋岸の地域）に分布の傾向があるそうです。また、九州では熊本県にはありませんが、福岡県には多く、装飾古墳で有名な桂川町の王塚古墳が含まれています。さらに出土点数では、ほとんどが一〇点以下で、福岡県苅田町の富久8号墳の二一点が最多でしたので、東海村白方古墳群第9号墳の出土点数三七点は今回調べた中では全国最多となり注目です。

また、白方古墳群第9号墳から出土した玉類の中には、色が鮮やかな瑪瑙製の管玉があり、大賀氏は舶載品の可能性を示唆しています。「漆黒の玉」の出土位置がその管玉と近いことから、管玉と一連のものとなれば、「漆黒の玉」も舶載品の可能性があります。

鷹ノ巣遺跡の「漆黒の玉」は、未製品やその素材で、製作遺跡の可能性が出てきました。また、三角形状のものは玉ではなく錘飾品かもしれません。今後の展開が楽しみな遺物であり、引き続き研究を続けていきます。今回の展示をとおして、情報をいただければ幸いです。

（稲田健一）

東海村白方古墳群第９号墳出土の玉（右端は瑪瑙製，縮尺不同）

鷹ノ巣遺跡出土の石炭製品（未製品を含む）

都道府県名	遺跡数
茨城県	4
千葉県	10
神奈川県	1
福井県	2
三重県	13
和歌山県	3
大阪府	1
奈良県	7
兵庫県	3
岡山県	5
広島県	1
島根県	1
福岡県	7
宮崎県	1

＊展示に際しご協力とご指導をいただき，ありがとうございました：片平雅俊氏・小林清隆氏・小林友佳氏・白井久美子氏・谷口陽子氏・東海村教育委員会・日立市教育委員会

＊参考文献：大賀克彦 2013「玉類」『古墳時代の考古学』第４巻（副葬品の型式と編年） 同成社／流山市教育委員会 2015『千葉県流山市加町畑遺跡Ｊ地点』流山市埋蔵文化財調査報告第 56 集 勾玉工房 Mogi

埋文センターの日々 前期 2026

4月

11 虎塚古墳石室点検／14–18 **勝倉若宮遺跡試掘調査**／21–**下高井遺跡発掘調査開始**／21–24 **津田若宮遺跡試掘調査**／23 市教職員研修／28 駒澤大学福田氏資料調査【武田遺跡群古墳時代の土器】

5月

1 茨城大学出張授業【センターの活動について】／–12 **下高井遺跡発掘調査終了**／12–19 **高野富士山遺跡試掘調査**／–13 **第22回企画展「古代の砥石の産地を探す」終了**／19–29 **市毛上坪遺跡試掘調査**／20 茨城大学出張授業【センターの活動について】／21 遺跡めぐり「千葉県龍角寺古墳群探訪」実施

／26 常陸の国風土記の世界—埋蔵文化財を学ぶ会見学／26–28 **三反田古墳群試掘調査**／29 中根小学校3年生見学

／30– **ワンケース・ミュージアム66「ひたちなか市の土偶」開始**・市コミュニティバスが敷地内まで運行開始

6月

3 台風6号被害調査

4– **地蔵根遺跡発掘調査開始**／5 文化財室主催文化財講座／6 茨城キリスト教大学博物館実習実務実習

9–12 **宮前遺跡試掘調査**／13 ひたちなかユネスコ協会研修会講座「ひたちなか市の史跡について」／16 菅谷西小学校6年生見学

23–30 **堀口遺跡試掘調査**／26 市生涯学習課講座こらぼDEまなぼ「古代人は何をみた？ひたちなか市の古墳から読み取る海との歴史」

7月

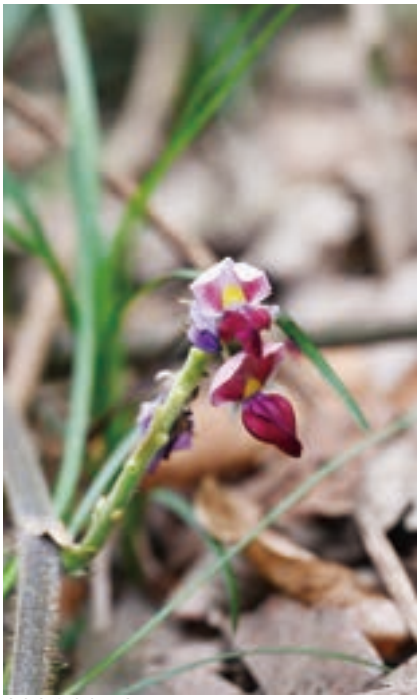
–12 **ワンケース・ミュージアム66「ひたちなか市の土偶」終了**／17 那珂市中央公民館見学（次頁右上）

虎塚古墳花便り 37 クズ

今回ご紹介する花は、「クズ（葛）」です。クズはマメ科クズ属の多年草で、北海道から九州まで日本各地で生育しています。名前の由来は、かつて葛粉の産地が奈良県の吉野川上流の「国栖（くず）」であったからとされています。クズは根が太く大きく、多量の良質なデンプン（くず粉）を含んでいます。茎はつるになって長く伸び、全体に黄褐色の粗い毛があります。茎の繊維は丈夫で、古代にはその繊維で編んだ布は葛布（くずふ）と呼ばれていました。花は紅紫色で、長さ約二㎝で一五～二五㎝の総状に多数つきます。花の咲く時期は七月～九月頃で、秋の七草の一つに数えられています。

虎塚古墳から十五郎穴横穴群に向かう道を歩いていると、クズの花びらが散っていて、この花の存在に気付きます。甘い物好きの私としては、暑い日に葛切りが食べたくなる植物です。

（稲田健一）



2024.09.18

／18-ワンケース・ミュージアム67「漆黒の玉」開始／22-28 外野開拓古墳群試掘調査／24 ひたちなかキャリア探検ラリー①／25 ふるさと考古学①「ようこそ考古学へ」（講師：さかいひろこ氏）／26 ふるさと考古学②「もっと昔のひたちなか」（講師：矢野徳也氏・さかいひろこ氏）／-28 地蔵根遺跡発掘調査終了／28 田彦小学校学童クラブ見学／28-29 和田ノ上遺跡試掘調査／31 高野小学校学童クラブ見学↵

8月

15 ひたちなかキャリア探検ラリー②／18-19 インターンシップ（武蔵大学）／18-23 博物館実習（立正大学・駒沢大学）↵

／18-20 高野富士山遺跡試掘調査／22 国営ひたち海浜公園「勾玉づくりに挑戦」指導／23 ふるさと考古学③「十五郎穴のこれからを考えよう1」（講師：助川諒氏・さかいひろこ氏）↵

／25-27 向坪遺跡試掘調査／27 市職員研修生／29 ふるさと考古学④「遺跡から考える戦争」（講師：玉川里子氏・さかいひろこ氏）

9月

8-17 峪遺跡試掘調査／-6 ワンケース・ミュージアム67「漆黒の玉」終了／13 ふるさと考古学⑤「遺跡でアート!」（講師：安芸早穂子氏・さかいひろこ氏）／15-25 大和田遺跡試掘調査／19 ふるさと考古学⑥「馬渡はにわ物語・虎塚壁画の発見」（講師：阿久津久氏・さかいひろこ氏）↵

／26 ふるさと考古学⑦「虎塚・十五郎穴のまわりの植物」（講師：小幡和男氏・さかいひろこ氏）／29- 上馬場遺跡試掘発掘調査開始

入館者状況（2026.4.1. ～ 2026.9.30）

月	開館日数	個人（人）	団体（団体）	団体（人）	計（人）
4月	26	256	1 (0)	25 (0)	281
5月	27	344	3 (1)	102 (54)	446
6月	25	207	4 (1)	106 (60)	313
7月	27	299	6 (0)	135 (0)	434
8月	26	410	12 (1)	63 (3)	473
9月	26	200	3 (0)	60 (0)	260
合計	157	1716	29 (3)	491 (117)	2207

（）内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び（公財）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『市報ひたちなか』及び下記のホームページでお知らせします。
https://hitachinaka-maibun.jp

編集後記の 虎の子

現在、虎塚古墳と十五郎穴横穴群の保存活用計画を策定している。これは、これらの遺跡を今後どのように保存し活用していくかを検討する重要な計画となる。

策定後計画を進めて行くには、行政は勿論、地域の協力が必要となる。その中でも将来を担っていく子どもたちの力は重要だ。嬉しいことに、ここ数年、高校生の活躍が目立ってきた。例としては、「茨城の魅力を探究し発信する高校生コンテスト」通称「いばたん」や、全国高等学校総合文化祭への参加で、虎塚古墳を主題に取り上げてくれている。「あきた総文2026」では、水戸二高放送部の西野伶さんが、アナウンス部門で虎塚古墳を紹介し、予選を勝ち抜いて全国大会に出場した。虎塚古墳は、小学三年生の時に社会科見学で訪れており、市を代表するものとして虎塚古墳を選んだという。地元の高校生が、全国からたくさんの人が集まっている場所で、虎塚古墳を紹介してくれたことが何よりも素晴らしい。

今後も、虎塚古墳や十五郎穴横穴群を選んでくれるように、遺跡の認知度をもっと高めて、子どもたちが宣伝本部長になってくれるアピールが必要だ。

水戸二高放送部のみなさん（西野さんより提供）

ひたちなか埋文だより　第65号　　2026年10月31日発行
編集　公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社　　発行　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011　茨城県ひたちなか市中根3499　TEL 029-276-8311　FAX 029-276-3699
印刷　大富印刷株式会社　　ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ